飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和２年８月２５日現在

今月の重点活動

■新技術導入　トマト、モモ・空調服による夏季の労働負荷軽減効果の実証

農業普及課では、新技術導入普及支援事業を活用して、空調服（電動ファンを備え、衣服内に外気を送り込むことができる）が夏場のトマト栽培管理、モモの箱詰め作業に与える労働負荷軽減効果について調査を行った。

生活技術研究所協力のもと、夏秋トマト生産者３戸、モモ生産者２戸に対し、空調服着用時、非着用時における衣服内温湿度、体表面温度、心拍数、疲労度、作業性等について調査した。心拍数モニタリングにはスマートウォッチとタブレットを活用した。

実証した生産者は、「夏の昼間でもこれなら作業できる」「高温時の着用により発汗量が少なくなった」と空調服の有効性を実感している様子であった。

今後はデータを詳しく解析し、労働負荷軽減効果についてトマトやモモの反省会等で農家へ結果報告を行う。

【トマト誘引作業のモニタリング】

【空調服の着用により労働負担を軽減】

多様な担い手づくり

■担い手　農業次世代人材投資事業対象者の就農状況確認を実施

飛騨市では、農業次世代人材投資事業の給付対象者10経営体に対して就農状況の確認調査を行った（高山市では８月末に状況確認を実施予定）。飛騨市の担当者、飛騨農林事務所（農業振興課、農業普及課）、ＪＡと協力して、本人に経営開始計画に対して現在の経営規模、生産量、売上高、ほ場の現状、帳簿の管理状況等を聞き取り、今後の課題も確認した。

計画以上の生産量や売上を伸ばしている就農者もいるが、計画通りに進んでいない就農者数名に対しては、今後生産技術、経営管理などの面で更に重点的な支援が必要である。

【就農者から聞き取り確認】

売れるブランドづくり

■水稲　水稲採種ほ場で審査を実施

高山市丹生川町の約25haのほ場において「たかやまもち」や「ひとめぼれ」など５品種の採種事業を実施している。採種ほ場で生産された種子は、次年度に一般種子として生産者に供給されるため、厳格なほ場管理が求められている。

県主要農産物種子審査員に任命された農業普及課職員等により出穂期の審査を８月中旬に実施した。各審査員は、ほ場ごとに生育状況を確認するとともに、異品種や変異株の有無、雑草や病害虫の発生状況について基準を満たしているか審査を行い、水稲種子に求められる純粋性や健全性が保たれているか確認を行った。今後は、適期刈取指導等を実施し、次年度の種子が確実に確保できるよう指導を行っていく。

【猛暑の中のほ場審査】

■宿儺かぼちゃ　宿儺かぼちゃの圃場審査を実施

飛騨の地域ブランド野菜である宿儺かぼちゃは、細長いヘチマのような独形な形をしており、その味の良さから消費者に評価されている。

令和２年度の生産は、暖冬の影響からアブラムシの発生が多く、アブラムシによって媒介されるモザイク病の発生や、記録的な長雨による土壌の排水不良など、宿儺かぼちゃの生産には厳しい条件であったが、研究会員の培った経験と技術で圃場の管理に努め、宿儺かぼちゃが着実に実をつけている。

【宿儺かぼちゃの管理状況を評価】

農業普及課では、高山市、ＪＡひだ、宿儺かぼちゃ研究会と協力して、果実の着果状況や大きさ・管理状況・生育揃い・葉の健全度といった観点から圃場審査を実施し、優良事例の掘り起こしと基本的な管理作業の重要性の理解を促した。

農業普及課は栽培に関する基本技術の発信などを継続して行い、安定した宿儺かぼちゃ生産ができるよう支援を行っていく。

■モモ　各組合でモモ「白鳳」の目揃え会を開催

７月下旬からモモ「白鳳」の収穫が始まり、各組合で目揃え会が開催された。当日は、市場の関係者から販売状況等について、普及課から病害虫の発生状況や収穫の注意点等の情報を提供した。その後、各生産者が出荷の基準の確認や今年のモモの出荷予測の確認を行った。

今年は、開花後の気温が高かったため、平年より２～４日程度早く収穫が始まった。新型コロナウイルスの影響で直売所の客数や予約数も心配されたが、平年並み程度の予約が入っており、販売状況も好調である。

農業普及課では、今後も関係機関と連携をし、モモの安定生産に向けた支援を実施していく。

【意見交換をする生産者】

■大豆　**大豆現地研修会を開催**

飛騨市の古川町大豆生産組合は、８月７日に大豆の生育状況の確認と栽培技術の向上を目的に現地研修会を開催した。今年の大豆は、７月の豪雨と長雨の影響を受けて湿害が発生したほ場が多いため、各生産者の栽培ほ場のうち特に被害が大きかったほ場を巡回し、被害の状況や今後の対策等について確認した。

農業普及課では、栽培管理研修として今後の管理について指導をおこない、近年問題となっている帰化アサガオ対策の他、病害虫防除等について情報を提供した。

【湿害や生育の状況を確認】

■白川村　**イチジクのコンテナ栽培技術の視察**

白川村の水稲生産者および役場の担当者とともに、８月６日に富山県果樹研究センターを視察した。

現在白川村では、水稲の育苗ハウスを利用したイチジクのコンテナ栽培に取り組んでいる。今回の視察では、果実を多く得るための土の量や枝の伸ばし方、適切な水管理などについて、研究員から詳細な説明がなされた。

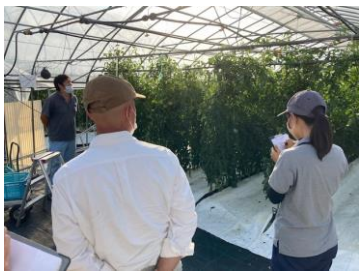
農業普及課では、生産者の所得向上や新たな特産品の創出につながるような取り組みを今後も支援していく。

【イチジクの先進的な栽培技術を学ぶ】

■夏秋トマト　**第３回トマトチーム会議～ほ場にて今後の指導内容を検討～**

農業普及課では、ＪＡひだ営農指導員や試験研究機関との連携をより密にするため、定期的に会議を開催し、情報共有や今後の指導内容について検討を行っている。

８月17日、中山間農業研究所にて第３回目のトマトチーム会議を開催した。会議では、７月の豪雨や日照不足の影響について意見交換を行い、８月下旬から９月上旬にかけて各地区で行われる中間目揃え会の指導事項について協議した。また、次年度の施肥設計や防除体系についても検討を行った。



【中山間農業研究所の試験内容を把握し今後の指導に活かす】

会議後には中山間農業研究所のほ場にて試験状況を把握するとともに、今後の栽培管理について意見交換を行った。

農業普及課では、今後もＪＡひだ営農指導員と連携しながらトマト生産者の経営安定に向けて支援を行っていく。

■ほうれんそう　**夏期の品質向上に向けて（産地内着荷調査）**

７月 30 日、ＪＡひだ本店にて、「飛騨ほうれんそう産地内着荷調査」が開催された。前々日の出荷者約 200 名から各１袋づつ抜き取り、輸送・陳列等を想定し、冷蔵・常温等の温度変化を付けて管理したほうれんそうについて、部会役員、ＪＡ担当者、普及指導員等が３人１組になり、出荷規格、調整具合、軸の折れ、腐り、しおれ、病害虫、異物混入の項目ごとに評価した。

【項目ごとに品質を確認】

例年であれば梅雨明け直後の開催となるが、今年度はまだ梅雨が明けておらず軟弱に生長したものが検査対象となり、株が細く、葉肉の薄いものもみられた。

農業普及課は、部会活動を支援するとともに、飛騨ほうれんそうの品質向上に向け指導を行っていく。

■第三品目　**モロッコインゲン出荷目揃え会に出席**

吉城蔬菜出荷組合露地部会において、８月 11 日（火）にモロッコインゲンの出荷目揃え会が開催された。全農からの販売情勢報告、ＪＡからの規格の確認とともに、農業普及課からは、７月の長雨による病害多発の懸念があることから、病害防除を重点的に、今後の管理について指導を行った。

【実物を見て出荷規格を確認】

今年は、春の低温や長雨など、栽培しにくい環境だったが、農業普及課では、今後も良品の安定出荷に向けて、指導を継続していく。

■ほうれんそう　**ラジコン草刈機調査【スマート農業加速化実証事業】**

８月６日、高山市清見町にてラジコン草刈機の実証試験を実施し、傾斜地での草刈り作業について、刈払い機とラジコン草刈機を用いた場合の、作業時間、作業負荷を調査した。

【ラジコン草刈機で傾斜地の草刈り作業を行う生産者】

10ａ当たりの作業時間は、刈払い機は 85 分、ラジコン草刈り機は 58 分で約３割削減された。

作業負荷については、刈払い機は、刈り払う向きが常に一方向となるため、傾斜地では片側に大きな負担がかかるが、ラジコン草刈機は、作業者は平地を歩くだけで良いため、身体的な負担なしで作業を行うことができた。

農業普及課は、事業の進行管理役として実証調査に協力し、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。

住みよい農村づくり

■災害ボランティア　災害に強い産地作りを目指して

８月７日（金）農業普及課２名は、ＪＡひだが募集した災害復旧ボランティアに参加した。

飛騨地域は７月の豪雨で道路の流防、川の氾濫など多大な被害を受けた。水田、ハウスなども土砂が流入するなどの被害が発生した。

当日は、ボランティア要請のあった高山市塩屋、丹生川町の２地区の土砂搬出を行った。搬出終了後、生産者からお礼を言われ、参加したＪＡ全農ぎふ、JAひだ職員らと予定より早く作業が完了し良かったと喜び合った。

【土砂を運ぶ全農とＪＡ職員】

休憩中には、生産者と被害ハウスの栽培復帰について助言もでき農業普及課らしい参加ができたと考える。